

社会や顧客への貢献を第一に 新しいビジネスモデルを構築



高校S63年卒

長崎 洋也

三興バルブホールディングス株式会社
代表取締役社長

● **Profile** ながさき・ひろや／福岡県出身。1970年8月21日生まれ。1998年4月、三興バルブ継手入社。2018年6月、同社代表取締役。2019年6月、三興バルブホールディングス代表取締役社長。趣味は食べる。日本酒をはじめ酒を好む左党でもある

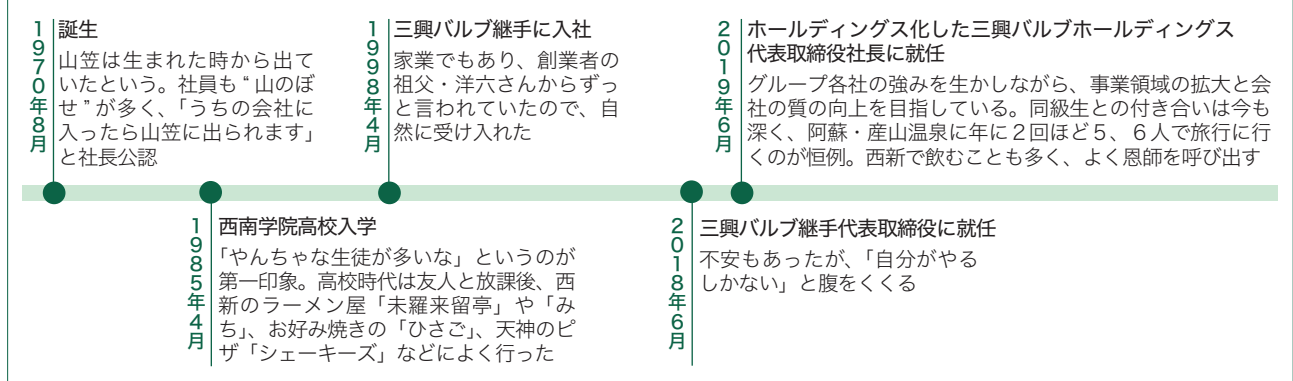
会社概要 本社所在地／〒812-0032 福岡市博多区石城町12-1 TEL 092-281-2763 創業1947年6月 事業内容／配管インフラ設備の設計・資材調達・モジュール製作・配送・施工までの一気通貫事業を手掛ける。不動産事業も2026年からスタート。グループは9社 資本金／4,500万円 売上高／240億円（2025年12月期、グループ）従業員数／約400人（グループ）



福岡大空襲で焼け野原になった博多の都心が復興へ歩んでいた1947年。街の再建に欠かれない配管資材を専門に扱う商社が産声を上げた。三興バルブホールディングスの前身、三興商会だった。祖父・洋六（ようろく）さんが先輩2人と起こしたことから三興と名付けられた。創業以来、大切にしてきたのは「在庫は切らさない」「配達は早く」「お客様の役に

立つ店づくり」という精神だ。資材はリヤカーで運ぶのが一般的だったころ、注文が来たらすぐに配達できるようにと、いち早くスーパークラブを導入。資材を積んで顧客の元へ急いだ。創業の精神は、父・洋臣（ひろおみ）さんを通じてしっかりと継承されてきた。そして今、「お客様の役に立つ」という変わらない精神を軸に、建設業界が抱える課題

＜Career History＞



に応える事業へと発展している。

建設業界の懸案を「一気通貫」でサポート

建設業界では、人手不足や長時間労働、技術者不足などが大きな課題となっている。そうした顧客や業界の困りごとに応えるため、配管資材を販売するだけでなく、これまで顧客が担っていた加工や図面作成などの業務を支援する領域へと事業を広げてきた。その考えを形にしたのが、設計から施工図、資材調達、加工・製作、施工までを一気通貫で担う「+aF（アルファフィットシステム）」だ。

2015年に三興バルブ継手で自身を含めた10人で構想を練り上げた。従来、顧客が複数の企業へ個別に依頼していた工程をグループでワンストップ化することで、発注や調整にかかる負担を減らし、建設現場の生産性向上を支える。創業時から守ってきた豊富な在庫に加え、時代とともに顧客が求める役割そのものを広げてきた。

今に生きる西南で学んだ黄金律

母校で学んだ今も忘れないキリストの教えがある。「自分にして

もらいたいと望むことは、あなたも人にしなさい」。新約聖書のマタイによる福音書7章12節にあり、「黄金律」と言われる。

「今、私たちが事業の主軸に置いているのは、困っている建設業界や資源、環境問題に直面する社会にいかに関与するかです。先に皆さんに貢献して最後に自分のところに帰ってくればいいんです」。長崎社長が大切にしている経営の考え方には、西南で学んだ黄金律が通底している。

現在目指しているのは、「クリティカンパニー」だ。社員が働きがいを感じられる環境や成長できる機会をつくり、顧客や社会に提供する価値を高めるなど、会社そのものの質を高めていく必要があると考えている。その考えは地域との関わりにも表れている。

街を生き抜く、人を育てる博多祇園山笠では、自身も土居流の総代などの要職を務め、社員にも参加を促す。現在は4つの流れに20人近くの社員が関わっている。「山笠は上下関係や人との付き合いを学べ、自発性も育ちます」。地域の伝統を支えるだけでなく、社員も会社の外で人との関わりや自発性を学ぶ機会になっている。

オフィシャルパートナーシップ契約を結んだ九州プロレスの支援も続ける。不登校の子供たちへの支援など、プロレスを通じて人を元気づける活動に共感している。

事業、社員、そして地域。西南で学んだ「人のために」という教えは、現在の会社づくりや社会との関わりにもつながっている。

自由な校風で広がった思考

高校時代を振り返ると、「西南の校風の自由がすごくよかった。先生も個性あふれる方が多く、とても思考が広がりました」という。一方で、西南での「自由」は、自分自身への責任と表裏一体だった。「自分に対する責任は重いです。やれよって言われなくても、自分でやれよってね」。自ら考え、行動する。高校時代に感じた「自由と責任」の精神は、現在の経営にも通じるものがある。

現役の後輩たちにも、こうエールを送る。「自由だからこそ、自分を律して自らの責任で頑張ってください。一生懸命やっていくからこそ自由があるんですね。一生懸命やって自由を謳歌すればいいと思います」